

みかわきぞう
見川喜蔵（上）

今から百八十余年以前、粕壁宿の名主に喜蔵という人がいた（上町）。喜蔵は元文三年（一七三八年）粕壁宿の名主の家に生まれた。父母に孝養をつくし、父母が病床にあるときは枕辺を離れず看護につとめ、薬は自分で毒味した後に与える程であった。名主になると何事も公平に行ない差別なく訴えを聞くので、多くの人から父母のように慕われていた。

天明三年七月七日、三万五千余人の死者をだす浅間山の噴火があった。火山灰は粕壁地方まで降り、田畑を埋めて作物は大被害を受けた。生活に困った百姓達が名主にその窮状を訴え出た。喜蔵はすぐに粥を煮て飢えた人びとに施したり、宿内の地主を説いて雑穀を提供させて急場を救った。

三年過ぎた天明六年丙午に、六月から七月にかけて雨が降り続き関東は大洪水に襲われ飢饉となり、生活に困った人びとは徒党を組んで地主宅や商人宅を襲い、打ちこわしを行ない米麦などを奪い合った。喜蔵はこれらの人びとを鎮め米問屋を説いて廻り、販売する場所を指定して価格を安くして売らせたりした。また、自家用の米を出し粥を煮て与えたり、地主を説得して米麦を供出させたりした。

これにより飢饉を免れた者は三百余人に達したという。人びとは喜蔵の恩に感謝して、幕府にこのことを上申しした。その後、喜蔵は宿内の耕地を調査して、水害を防ぐために堤防を高くすることを考え、自費を投じて長さ五百間（約1^{キロメートル}）の堤を築いた。

寛政三年（一七九一年）八月にまた洪水が襲ったが、喜蔵は風雨の中、戸毎に説いて土俵をつくらせ古堤の上に積ませた。昼夜の働きにより下流の田地およそ二万石以上の流失を免れることができた。これが喜蔵堤と名付けられた堤である。

この他、喜蔵は下野国（栃木県）都賀郡乙女村に未開発の土地があることを知り、代官および近隣の村役人と協議しこの土地を開墾した。幸手領の文左衛門（幸松地区の人）と相談して、流民を集めてこの地に移住させた。その数六十三人と伝えられている。この土地も喜蔵の努力により数年にして立派な耕地になった。

幕府は、喜蔵のこれらの善行を賞して銀若干を賜い、終身帯刀、子孫に至るまで苗字（見川氏姓）を名乗ることを許した。さらに頌孝義録に喜蔵の事績と氏名を載せ発表した。

文化二年（一八〇五年）十月二十九日、病のため六十七歳で没した。翁の面影等については墓碑の文中につきの如く記されている。

翁の顔形はいかつくて一目見て忘れられない印象を与える。また声は大つりがねのように大きく、生来酒をつき合い程度に飲むが、時によっては数斗に至っても乱れることが無く、六十余歳になっても意気盛んで、客にすすめること壮年のような人であった。

喜蔵の墓は成就院にある。子息次郎吉が建立した墓碑には漢文で五九六文字が綴られている。

初出「広報かすかべ 昭和五十五年三月」かすかべの歴史余話